

新しいお洋服

宇間 吹

今日から彼氏とデート！

鏡に写った自分の姿、とくに腕を通した真っ白でさらさらなコートを見て、私はニンマリと笑みを浮かべていることに気づく。

「ふふっ、楽しみだな……」

彼は新しいこの服を気に入ってくれるだろうか。お気に入りの服を着て、彼と毎日過ごすんだ。思えば、この服を選ぶにもいろいろな検討があった。やっぱり、お気に入りはずっと着られるように丈夫であってほしいし、軽さも必要。デザインも派手すぎず目立たないおしやれが良い。悩みに悩んだ末購入を決めたのがこの服なのだ。これからは楽しみすぎていろいろな想像を浮かべてしまいが、そろそろ鏡から離れて彼のところに行かないと。妄想を断ち切って玄関を飛び出す。太陽の暖かな光が顔に差し、今日一日が素晴らしいものになることを予感させる。鍵もかけてバツチリだ。ルンルン気分では道へ飛び出した。

鏡を離れてみると、ますますはやく彼に会いたくてたまらなくなる。どうして道の途中で踏切なんかがあるのかしら。そんなことを思いながら、ガラゴロンと古びた音を立てながら遮断器の降りた踏切で、電車が通り過

ぎるのを待つ。

隣で一緒に待っている見知らぬ女の子も早く踏切を渡りたいのか、遮断器から身を乗り出すくらい姿勢で電車が来るのを待っていた。

もうちよっと遮断器が閉まるタイミングはギリギリでもいいのに、なんて思いながら待っていると、遂に電車がやってきた。

電車を待ちかねた隣の女の子も、同時に飛び出す。

頬に生暖かい液体が付いたのを感じた。

一瞬間が真っ白になって、なんとなく着ている服を見下ろした。

真っ白だった服にたくさん赤い斑点がついている。

まだ色は鮮やかだ。

「私の服が……違う、気持ち悪い。弁償、してもらえない……？」

私の質問に答える人間はもういなかった。

◆ ◆ ◆

踏切で立ち尽くしていると、気づけば周りに警察と鉄道会社の人があった。制服がかっこいい。私の彼にも似合うのかな。彼は今も私を待っているというのに、こんな服になっちゃうなんて。これじゃあ、会いに行けない。

「ショックを受けてらっしゃるところ、申し訳ありませんが……」

制服が、私に声をかける。目撃証言が欲しいらしい。しかし、知らない女の子が勝手に飛び込んだだけで何も知らない、としか話せなかった。

「ふむ、そうですね。防犯カメラの映像とも合っているのだし、引き止めて悪かった。もう帰っていただいて大丈夫ですよ」

帰って、と言われても、こんな服着ていたくない。「ああ、失礼しました。そのコートは証拠品として頂いてもよろしいですか？」

同じものの新品と交換して欲しい。コートが無いと少し寒い。そう伝えると、制服の人は、少し悩む素振りを見せた。

「そういうことは警察としては……。いや、そうだ、遺族に頼んでみましょう。どこの何と言う服ですか？」

私が答えると、警察の人は私の住所を聞き出し、あとで届けるというどこかに消えてしまった。いま着るコートも無いままだ。

「はあ……」

ため息を一つつくと、少し落ち着いた気がする。いつの間にか太陽も雲に隠されてしまった。もっと寒くなるから、ひとまず家に帰ろう。そう決めて、私は帰路についた。



それからは、寂しい一週間だった。だって悩んで選んだおニューのコートが私の手元に無いから。今度会うときは、とっておきのコートを着ていくと約束したのに。これでは、彼と一緒にいられないのだ。代わりの服がいつ届けられるかも分からない。もしあのおまわりさんが届けてくれるとしたら、家に居ないと受け取れなくなるかもしれない。そう思うと、なかなか家から出られなかった。

その時、ふとピンポン、と音がした。

「来た？」

私は元気良く玄関に駆け寄る。

「はいい！」

ドアを勢い任せに開ける。

「ぐわあ！」

変な声が出た。どうやら、相手は開いたドアにぶつかってしまったようだ。

「あつ、すみません！」

あわてて謝罪する。目の前には制服。脇には、小包。

来た！

「いやあ、ドアを開けるときは気を付けてくださいね？」そんなことを言いながらおまわりさんは小包を掲げる。

「おまたせしました。これが代わりのコートです」  
待ちに待った大切なコート。こんなに嬉しいことはない。すぐにでも彼に会いたい。

「ありがとうございます！」

そういつて、扉を開めた。小包を開くと、悩んで選んだ真つ白でさらさらしたピカピカのコートがここにあった。新品の澄んだ匂い。

張り切っておめかししなきゃ。

◆

ちよつと時間がかかっちゃったけれど、満足の行くメイクが出来た。今度は汚すことの無いようコートは一旦袋に入れて靴にしまう。ルンルン気分です。そのまま、スキップするような足取りで彼の家に向かった。

今日は踏切にかからなかった。彼の家までもう少し。安心してコートを羽織る。光り輝くさらさらをたなびかせながら、チャイムを鳴らす。

ピンポン、という音とともに、家の中がごそごそ動く。

「は〜い」

彼ののんきな声が聞こえてくる。

ガチャリと音がして、扉は開かれ、彼は顔を覗かせる。

「おまたせ！」

私は思いきり彼に抱きついた。

◆ ◆ ◆

彼の家に一泊させてもらい、今日から待ちに待ったコート！一緒にお出かけの時間だ。おかげさまで、新しいコートからはほのかに彼の匂いがする。彼に包まれて、とっても幸せな気分。

これからはずっと一緒だよ。二人で色々な世界を見に行こうね。

今日のデートのはじまりだ。

◆

ある晴れた昼下がり。

女性が一人、踏切で立ち止まる。

「今日は一緒にどこ行こう？」

その質問に答える人間はいない。

身体には、赤茶の斑点のついた真つ白なコートが、ひらひらと巻き付いていた。